

家族の機能不全と虐待に関する試論

菅野 恵

Dysfunctional families and abuse

Kei Kanno

This paper attempts a review and examination of the relation between dysfunctional families and child and elder abuse from a family systems theory perspective. As a result, children raised in a centrifugal family are suggested to have the potential to repeat regular abuse and neglect when they themselves start childrearing or providing nursing care for their parents. For children raised in a centripetal family, there are issues around dependence and increased risks of sudden abuse or neglect caused by fatigue from childrearing and providing nursing care. The need for early intervention for dysfunctional families and for mental support as a means to prevent intergenerational transmission of abuse is discussed.

Key words : dysfunctional family, child abuse, elder abuse, family system

1. はじめに

「虐待大国」アメリカ(原田, 2008)の後を追うように、日本の虐待問題は、深刻の一途を辿っている。2000年以降、児童虐待防止法、高齢者防止法が制定されたことも影響し、虐待問題への社会的関心が、より高まりつつある。厚生労働省による近年の虐待の相談・通告件数をみると、児童虐待、高齢者虐待共に増加し続け、減少する兆候はみられない。日本における虐待問題は、法制化や虐待防止の啓発活動の浸透により、従来から潜在的に存在していた問題が顕在化したというとらえ方もある。しかし、児童虐待を例にみると、子どもの虐待死の増加(平成20年度には5年前の約5倍)、2004年に大阪府岸和田市で起きた中学生虐待事件(軟禁状態で歩けないほど衰弱させ、排泄物も垂れ流しにさせていた事案)などの深刻な実態は、従来から存在したであろう虐待問題の顕在化という説明に収まらない。さらに、少子高齢化を支える社会基盤の脆弱性(社会保障問題など)と生活水準の低下(雇用問題、貧困など)が、個人のパーソナリティの要因に加えて、虐待発生のリスクをより

一層高めているといってもよい。

さて、これまで児童虐待や高齢者虐待の問題は、児童福祉領域、高齢者福祉領域の各々で多くの研究や議論がなされてきた。しかし、児童および高齢者の虐待をライフサイクルから連続的にとらえ、家族の機能不全の観点から論じたものは、あまりみられない。そこで本稿では、家族のどのような機能不全から虐待が生み出され、いかに世代間に伝達していくか、心の支援を実践する立場から検討を試みたい。

2. 家族システムの機能不全と虐待

まず、虐待発生のリスクを生じやすくさせる個人のパーソナリティの形成に大きく関与するテーマは、家族システムの歪みとしての“機能不全家族”である。つまり、家族内において“接触と分離のバランス”（Hoffman, 1981）をとれなくさせる相互作用の積み重ねが、家族システムの機能不全を生じさせるのである。家族システムの特性についてビーバーズ（Beavers, 1993）は、“遠心的家族”（Centrifugal family）と“求心的家族”（Centripetal family）の2類型を用いている。ここでいう遠心的家族とは、「家族を外側に追いやる力が働くこと」を意味し、求心的家族は「家族内に吸収し埋没させる力が働くこと」と説明している。そこで、遠心的家族と求心的家族に育った子どもが、どのような養育を受けやすく、その後の人生において心理・行動面にどのようなパーソナリティ傾向を生じやすくさせ、虐待とどのような関連となりうるか、ライフサイクルに応じて仮説的に検討を試みた（表1）。

表1 家族システムの特性と虐待との関係（菅野, 2011）

	親から受けた 養育	ライフサイクルによる主な心理・行動面の傾向					
			幼児-青年期	成人期	子育て期	親への介護期	高齢期
遠 心 的 家 族 シ ス テ ム	身体的虐待・ ネグレクト	心理面	対人不信、他罰的思考				→先鋭化
		行動面	いじめ加害	(DV 加害)	日常的な虐待・ネグレクト		→先鋭化
			逸脱・非行		反社会的		
求 心 的 家 族 シ ス テ ム	依存的関係 (母子密着)	心理面	対人依存、自罰的思考、抑うつ				→先鋭化
		行動面	いじめ被害	(DV 被害)	親子の依存的関係の維持・強化		→先鋭化
			不登校		育児・介護の抱え込み		
			(家庭内暴力・突発的非行)		非社会的、ひきこもり		
		疲弊による突発的な虐待・ネグレクト					

まず、遠心的家族の中で育った子どもは、親からの身体的な虐待や、ネグレクト（養育の怠慢、拒否）のリスクを高める。また、虐待者への同一化を通して攻撃性を強め、学校ではいじめの加害者にもなりやすい。自己制御力も未熟であり、学校での逸脱行為や、非行

傾向を繰り返す。そのことで、親（養育者）や教師から叱責される体験が増加し、対人不信感や他罰的思考をより高めていく。成人期には、反社会性パーソナリティの問題が表面化し、DV（ドメスティック・バイオレンス）の加害者になる可能性もありうる。子育て期および親への介護期では、日常的に虐待を繰り返し、暴力行為で解決できないと世話の回避・放置といったネグレクトの行動をとることも想定される。幼児期からの叱責による積み重ねが、他者から支えられる体験の乏しさとなり、公的な支援・援助を拒否する傾向も強める。自身が高齢期を迎えると、対人不信、他罰的傾向を先鋭化させる可能性もある。

一方、求心的家族の中で育った子どもは、依存的な親子関係を形成しやすく、特に母子密着、共依存関係から心理的に自立しにくい環境で養育される。過保護、過干渉、過管理といった親の支配的な行為が、子どもの心理的発達を阻害し、対人依存的なパーソナリティを形成していく。幼児期から親の顔色を窺うことで、自発的に行動する力や自己主張する力が身につかず、学校でいじめ被害にも遭いやすい。その二次的問題として、不登校や非社会的な対人関係、ひきこもりを生じやすくさせ、家庭内暴力、突発的な非行に発展することもある。成人期になると、親から分離を試みるものの、依存性の問題がDV被害として表面化することもある。親からの心理的な分離に失敗することで、親子の不適切な依存的関係は、維持・強化されていく。子育て期に入ると祖父母となった親が子の育児に介入し、孫の育児をしようとする。親への介護期には、自罰的思考に陥り介護の問題を抱え込み、身体的にも心理的にも疲弊しやすくなる。さらに、親への欲求不満が適切に解消されないまま介護期を迎えることで、支配的関係を逆転させ、老化や認知症で弱った親への突発的な身体的虐待や心理的虐待といったリスクも高める。高齢期に入り、自罰的思考や抑うつ的なパーソナリティの先鋭化が、非社会的傾向やひきこもりを助長させ、孤独死となることもある。

このように、家族システムの特性によって問題の表出の仕方が異なるとしても、ライフサイクルに伴い、親から子への児童虐待、子から親への高齢者虐待、配偶者へのDV、さらに子から孫への伝達といった世代間の連鎖が、個人や家族の病理を深めていくのではないだろうか。

3. 虐待の“世代間伝達”について

以上のように、家族システムの特性を遠心的一求心的家族の観点から仮説的に提示してみたが、家族システムの特性とライフサイクルによる心理・行動面の傾向の2つの軸から虐待問題を検討することは、虐待の“世代間伝達”に関する議論にも役立つと思われる。

児童虐待における世代間伝達は、“親自身の心の傷や親子関係の葛藤が、誰にも理解されぬまま心に深く抑圧され続ける時、何気ない日常生活のふれあいの瞬間に、思わず無意識に子どもに伝わること”（渡辺，2000）と説明されており、親自身の被虐待体験から生じる

歪んだ愛着パターンが子に伝達される（Zeanah, 1989）といった報告もなされている。これは、親から子への不適切な養育だけでなく、年老いた自分自身の親に対する怒りの感情が、高齢者虐待として再燃されるといったネガティブな連鎖となりうる。

この「誰にも理解されぬまま」（傍点）という箇所に着目すれば、「誰かに理解されること」が重要である。そのため、親の心の傷や親子関係の葛藤を受けとめる心の支援システムが、世代間伝達や親への怒りの感情を断ち切る機会となる。このような虐待体験を含めた人生を丁寧を受けとめ、「理解された」と実感できるような相互作用を生じさせ、子どもとのかかわりを見直すような思考を促すためには、心の支援の専門家の力を借りることが、より質の高い支援につながるであろう。

4. 機能不全家族への早期の介入

さて、社会基盤の脆弱性や生活水準の低下も影響し、どの家庭でも虐待のリスクが存在すると考える必要がある。家族機能の低下に伴い、児童・高齢者の中には、問題行動や不穏な行動を通して希求サインを表出させることから、子どもの多動性を安易にAD/HD（注意欠陥／多動性障害）と決めつけず、もしくは高齢者の問題行動をすぐに認知症の副次症状とせず、家族の機能不全を疑いながら、わずかな希求サインを見逃さないように包括的な家族支援につなげる姿勢が強く求められる。

特に乳幼児期から不適切な養育（Maltreatment）を受けてきた子どもは、できるだけ早期から心の支援を含めた個別支援を受ける必要があり、保護者への支援や援助も関係者と連携しながら模索していきたい。ところが、緊急性のなさを独断で判断し、「おおごとにしたくない」といった感情や、子どもや保護者に対するネガティブな感情（例として「この親子のために時間を割きたくない」、「ややこしいことにかかわりたくない」）を学校関係者や対人支援・援助職が抱くことで、子どもの転学先や他の関係機関への情報の引き継ぎもされないまま、支援や援助を先延ばしにしてしまう事態が、より大きなリスク（例えば重篤な虐待や自殺）を生み出す。これは、支援・援助者側の「ネグレクト」（支援・援助の怠慢、放棄）といってもよい。

支援・援助のネグレクトとならないためには、学校関係者や対人支援・援助職に沸き起こるネガティブな感情を支えていく必要がある。学校現場では、子どもの「問題行動」（教員を心配させ、困らせるような行動）に対して叱責し続ける教員も存在する。このような場合、スクールカウンセラーなどの専門家が、子どもの「問題行動」の背景について教員と共に検討することで、教員の抱くネガティブな感情を、少しでもポジティブな感情に変容させていくことも可能である。これは、児童福祉施設や高齢者介護施設の職員に対しても同様で、施設職員の感情を支えていく心理専門職の存在が、教職員のバーンアウト（燃え尽き）を防ぎ、結果的に職場全体のメンタルヘルスへの貢献につながるのである。

5. おわりに

複数の学校関係者や高齢者支援の対人支援・援助職が、早期から機能不全の家族に継続的にかかわり、地域で見守る態勢を構築し、いざという時にアウトリーチ（手を差し伸べる行為）を試みたい。そのためにも、教育、福祉、医療などのさまざまな領域による連携が、支援や援助に欠かせなくなる。場合によっては、家族から支援や援助を拒否され、もしくは過度に依存され、ふりまわされることもある。しかし、家族に対して良質な相互作用を続けることが、対人関係の心理的な「心地よい体験」としての積み重ねとなるのではないだろうか。この心理的な「心地よい体験」が、専門的な心の支援や医療機関につなげるための下地となり、虐待の“世代間連鎖”を断ち切るきっかけとして考えたい。

引用文献

- Beavers, R. & Hampson, R.(1993). Measuring Family Competence: The Beavers System Model. In Walsh, F(Ed.), *Normal family progresses*. third ed. NY: The Guilford Press, pp.549-579.
- 原田綾子 (2008). 「虐待大国」アメリカの苦闘—児童虐待防止への取組みと家族福祉政策—
ミネルヴァ書房
- Hoffman, L.(1981). *Foundations of Family Therapy: A Conceptual Framework For Systems Chang*.
NY: Basic Books.
- (亀口憲治 (訳) (1986). システムと進化—家族療法の基礎理論— 朝日出版社)
- 渡辺久子 (2000). 母子臨床と世代間伝達 金剛出版
- Zeanah, C. & Zeanah, P.(1989). Intergeneration Transmission of Maltreatment: Insight from Attachment Theory and Research. *Psychiatry*, **52**, 177-196.